

BLEACH Change before  
you have to.

ジースリーエックス

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので  
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を  
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

八上京夜は死神になるべく真央靈術院に通うことになった。  
初めて友達ができたのだが・・・？

目

次

I      r      B  
      e      L  
      y      E  
      o      A  
      u      C  
      h      H  
      a      C  
      v      h  
      e      a  
      t      n  
      o.      g  
              b  
              e  
              f  
              o



# B L E A C H C h a n g e b e f o r e y o u h a v e t o .

死んでるのに腹が減る。

だが、流魂街で働こうにも仕事がない。

つまり餓える。

となると死神になるしかない。

テラ理不尽www

無事、真央靈術院に合格。

声をかけにくい雰囲気を醸し出しながら、注目の薄そうな後ろの端つこの席に座る。  
後ろから教室を見渡せば貴族とそれ以外の違いがよく分かる。

流魂街出身の子達は緊張して萎縮してたり、世話をなくそわそわしたり、元気に騒い

でたりするが、エリート様はそれを軽蔑の眼差しを向けて、同じエリートと嘲笑つているのだ。

嗚呼、眩暈がする。

なんだこの見るからに厄介なクラスは。

いや、どこも一緒だろうけど、これから学校生活不安でしかない。

・・・やつぱ、入るんじやなかつた。

「すまない。隣は空いているかい？」

そう声を掛けられて振り向くとインテリ系イケメンがそこにいた。落ち着いた雰囲気と爽やかな笑顔は昔ながらの優等生を思わせる。

なんとなく胡散臭さを感じるのは俺の錯覚だろうか。

「・・・ああ、空いてる。」

「じゃあ、ここにしよう。失礼する。」

素つ気ない返しで悪いが人見知りでボツチな俺にはこれが限界だ。許してほしい。でも少し驚いた。

俺以外にもこんな辺鄙な席に座るやつがいるとは思わなかつたからだ。

講義を聞くには少し遠く、仲良さそうにワイワイガヤガヤしてゐる他のやつらとは距離がある。そちらの方がカースト的に上位だろう。普通ならそつち等辺に行こうとするはずだ。

俺がこここの席を確保したのは、人から離れた場所という以外に程よく全体を見下ろせるから。人間観察が好きな俺にはピッタリの場所で、静かに過ごすにも丁度いい特等席だ。

こんな絵に描いたような優等生ならエリート組に混ざつても違和感無さそうにみえる。そういう奴は自分の魅せ方も分かつてて、時々見に来る死神やら先生から評価されやすい前の席にいることが多いのに。

机に肘を着き手に頬を乗せながら、しばらく横目で観察していると、支度を整え座り終えたそいつがこちらを向いた。目をそらそうとしたが、何か話そうとしたからそのままでいることにした。

「僕は藍染惣右介。よろしく。」

そう言つて握手を求めて、手を差し伸べてくる。

「これから共に過ごす仲間だ。仲良くしよう。」「なんて爽やかな・・・！」

ボツチオーラをこんなに出してゐるのにそれを無視するとは。見た目によらず強引な  
のか、たはまた空氣を読めないやつなのか。

いや、恐らく前者だ。わかつた上でそうしてゐる。でもまあ、断る理由はない。  
「……やがみきようや。八上京夜。よろしく。」

なんか初めて友達ができたんだけど。

なんか、嬉しい。

うん。良いスタートをきれたぞ。  
やつぱ来てよかつた真央靈術院。

真央靈術院に通つてから一人だけ友人ができる。

相変わらず隣の席だし、毎日ほぼ一緒に行動してゐるし、何気ない日常会話もする。斬拳走鬼の授業でも毎回組んでるし、学院のイベントごとでも一緒に。

もう親友と言つても過言ではないのでは？（ボッチの錯覚）

そんな俺と行動してしまうなんて可哀想な奴の名前は藍染惣右介。

茶髪に眼鏡だが一切の暗さを感じさせない大人な雰囲気。穏和で温厚な優等生である。

その人柄で老若男女問わば人氣があつて、確執確實だと思つていた貴族連中とも上手く立ち回つて仲良くしている。というか端からみれば貴族連中が下のようにも感じるくらいだ。当然先生方に一目置かれてる。

成績優秀。頭脳明晰。品行方正。才色兼備。

まさに文武両道を往く優等生様である。

だから気が付けばみんなから頼られるクラスのリーダー的な存在だ。  
少なくとも表向きは。

そう、表向きは。

だが俺には分かる。

人間観察を趣味とする俺だけが分かる。もう数十年単位でやつてる俺は人間観察のプロを名乗つても許されるレベルだ。

いや趣味悪いとか言わないでくれよ。

それくらいしかやること無いんだつて。ホント、ホントだから。マジでやること無いんだつて。めちゃくちや暇だから、暇加減嘗めてるだろ。現代っ子には地獄みたいな環境なんだぞ。本ですら流魂街で中々見ないだぞ。

分かつた・・・現状を教えてやんよ！

ソウルソサエティでも話にならん。みんな酒飲みばつかだし、てかそれしかないし。早く死神になつて現世に行くしか望みがないつ！

それでは聞いてください。

『おら東京に行ぐだ』の替え歌で

おら現世に行ぐだ

テレビも無エ ラジオも無エ

自動車そもそも走つて無エ

ピアノも無エ バーも無エ 死神毎日ぐーるぐる

朝起きで 剣持つて 二時間ちよつとの武者修行

スマホも無エ ガスも無エ 馬車は一日一度来る

俺らこんな村いやだ 俺らこんな村いやだ 現世へ出るだ

現世へ出だなら 錢コア貯めで 現世で車買うだエ

があ！

ギターも無エ ステレオ無エ

生まれてこのかた 見だごどア無エ

ゲームも無エ パソコン無エ どんどんフケでぐの俺一人

先生と 藍染と 刀を握つて素振りする

ゲーセン無エ 映画も無エ

たまに来るのは 豆腐売り

俺らこんな村いやだ 俺らこんな村いやだ 現世へ出るだ

現世へ出だなら 錢コア貯めで 現世で車に乗るだエヽ  
があ！

アツ ソレツ！ アツ ヨイショツ！

アツ ソーシマショ！ ソーシマショ！ ソーシマショツタラソーシマショラア！

ハツ！ ハツ！

デイスコも無エ クラブも無エ

ブレイクダンスは 何者だ

カラオケはあるけれど

かける機械を見だごとア無エ

ラノベが無エ 漫画も無エ

たまに来るのは 回覧板

信号無エ ある訳無エ

俺らの村には 電気が無エ

俺らこんな村いやだ 俺らこんな村いやだ 現世へ出るだヽ

現世へ出だなら 錢コア貯めで 銀座に家買うだヽ

俺らこんな村いやだ 俺らこんな村いやだ 現世へ出るだ

現世へ出だなら 錢コア貯めで 現世で車飼うだエ  
があ！

ふうー。すつきりした。あーどもども。すいませんね。いやーご静聴ありがとうございます。  
ざいました。大変お耳汚しいました。

さあ、これでわかつて貰えただろう。

現代つ子にこれがどれほど辛いことか。

駆け回る子供みたいに江戸時代の遊びに混ざれるか、無理です！

娯楽と言えば怖いおつちやんのいる博打だぜ？

絶対に行かない。テコでも行かんぞ。怖いから！

あれ、話がずれてる。

### 閑話休題。

俺的に惣右介は本当の実力を隠してる。  
何かあつて周囲を完全に欺いてる。そして何より本質的な部分でどこか違う世界  
に生きてる感じがする。つまり、本性を隠してる。そんな気がしてならないのだ。

今からそれを証明しよう。

題して『俺だけが奴の本性を知つてゐる件！』

あつ、ここからシリアルスパートだから。ネタの時間は終わりだ。

正直に白状してしまうと俺は人に興味がない。そしてそんな自分を信用していない。  
自分を信じない人間が他人を信じるか、それはない。ある筈がない。

つまり俺という人間は人間を信じていないのだ。

そしてそれを隠すのが超絶上手い。惣右介は気付いてるっぽいけどね。

そこに深い理由なく、そういう性分だつただけ。

酷いだろうか？ クズだろうか？ 最低だろうか？

もちろん間違いなく最低のクズ野郎だ。大丈夫。ちゃんと理解してる。

え？ なお悪い？

だけど表面上見繕つているだけでみんな少なからず意識、無意識だろうがやつてている  
だろう。嘘ついちゃダメだ。俺はそれが過剰なだけ。

もつと大袈裟に言つてしまえば俺含めすべての人間が敵なのである。  
であるならば観察してその人間が有害か無害か判断しなければならない。そして無

害と判断した相手の中から自分にとつて利益があるか無いかを判断する必要がある。

それをするのがこの俺だ。

客観的な視点で細かいところまで分析する。もう長年のクセみたいなもんで直せそうがない。許して。

さて惣右介はどうだろう。

周囲は奴を穏和で温厚、誠実な青年だと思つてゐる。そう信じてゐる。

それは惣右介が時々する人間らしい仕草や行動が奴に疑問を抱かせないからだ。みんな騙されてる。

例えは基本的に何でも完璧にこなすが親近感を沸かせるような失敗を時々すると  
いった行動だ。

だが良く見ると実は成績に一切関係ないところでやつてるし、その場の空気を読んだ  
行動の場合が多い。

もしくは自分がマイナスを負つたように見せかけて相手が落ちぶれるように仕掛け  
て導いてることが多い。実際妬み嫉みで行動した連中は必ず自然な形で学院を去つて  
いる。

奴は俺にしかわからないくらいにチヨー演技が上手い。おかげで違和感に気付くのに時間がかかった。表情の作りがエグい。何かあつて困った表情をしているが焦りが見えない。もうお腹ん中真っ黒だね。覗いたら深淵が見えるぜきつと。

意味なさげなアクションはブラフであり、計算の内である。まあ、そこまでして何を思い、何を願い、何を求めているのかはわからないけど。そこまでわかつたら逆に凄い。

ただ一つだけ俺と奴には共通点がある。

それはボツチということだ。

一緒にいるから、仲がいいから、友達がいそだからボツチじやないとは限らない。  
え？ 全然意味わかんない？

えーと、相手が仲間や友人であると判断するのは個人の認識だ。そいつが友達だと思えば友達だし、そうじやないと思えばそうじやない。周りがどんなに友達だと思っていたとしてもそいつが友達だと思っていなければその関係は成り立たない。

片思いじや、恋愛にならないのと一緒つてこと。勝手に期待して勝手に絶望する。自分一人が思いを押し付けても意味はないのさ。

とかラブを渋く語つてみるけど俺ドーテー。

惣右介は、いわば精神的ボツチ。

表面では笑顔を貼り付けて誰とでも上手くやるが、内心ではその内側に踏み込ませる人間を物凄く厳しく判断している。

頭の中に確かに天秤があり、自分に釣り合うに価する人間でなければ友人と認めないだろう。釣り合わずとも自分にとつて有用であれば本性を見せるが道具として利用する。

まあ、ぶつちやけ俺と変わらんね。たぶん。

惣右介は孤独に強い人間だ。

だが、集団行動する生き物だ。人間はボツチで生きれるようにできていない。だからこんなにもめんどくさいのに社会を形成している。

寂しいとか淋しいとか思わないのは壊れた人間か、あるいは孤独に馴れて必要な感情を感じなくなってしまった怪物なのかのどちらだ。恐らく後者。みんなが離れていくのが孤独。

自ら選んで一人になるのは孤高。

孤独と孤高の違いは俺はそう思っている。

前者が俺なら後者が惣右介。

孤高こそが藍染惣右介という男なのだ。

さて、これを踏まえて俺は惣右介をどんな位置付けにしてるのか、気にならない？

俺にとつて藍染惣右介は

間違いなく

敵である